

国際バカロレア小・中・高の社会系教科における段階性と ESDの視点を踏まえた小学校社会科の授業開発

—第4学年「持続可能なまちづくり」の場合—

中村 光 則 松 岡 靖
(広島県智学園中学校・高等学校) (教育学科教授)

本研究では、国際バカロレア機構(IBO)が提供する小学校段階の教育プログラム(PYP)、中学校段階の教育プログラム(MYP)及び高等学校段階の教育プログラム(DP)の各プログラムの枠組みを援用することによって、ESDの視点を踏まえた小・中・高の地理教育の重要概念の段階性を明らかにし、「持続可能なまちづくり」をテーマにした小学校社会科の単元を提案した。本研究の意義は、小・中・高の段階性が明確に示されていないESDにおいて、IBプログラムの重要概念や枠組みを援用することによって、段階性を踏まえた小学校社会科ESD授業を開発した点にある。IBのDP科目「地理」に規定された概念学習と探究学習の内容と方法を踏まえた小学校段階における社会科ESD授業の単元計画を提案した。

キーワード：ESD, 国際バカロレア, 概念学習, 探究学習, 持続可能なまちづくり

1. はじめに

「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development, 以下ESDとする。)」の理念が日本のナショナルスタンダードである学習指導要領に登場してから15年余りが経過し、その理念は現行の学習指導要領においても発展的に継承されている。その間、小学校社会科におけるESD授業の開発研究も散見されるようになった。

松岡(2018)¹⁾は、持続可能な社会の再構築を図る授業構成の論理を示し、北九州市を事例とした具体的な授業を開発することによって、小学校社会科ESD授業の可能性を明らかにしている。また、新谷(2023)²⁾は、小学校社会科ESD授業の基盤として、小学校段階で相互依存概念を学ぶ必要性について、社会科とESDの目指す方向や学びへのアプローチ、社会諸科学の相互依存概念の分析などを踏まえながら論じている。しかし、いずれの研究においても開発されたESD授業は、小・中・高の段階性を踏まえた上での授業開発ではなく、学校種の繋がりと発展性の点で課題があると指摘できるであろう。

また、国際バカロレアの小学校段階のプログ

ラム(Primary Years Programme, 以下PYPとする。)による小学校社会科の授業開発研究として、次の先行研究がある。

高橋・紙田(2022)³⁾は、「判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べたり、実験結果を分析して解釈・考察し説明したりすることができ、「学ぶことの楽しさや意義」「自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識」をもつことができる教育課程(カリキュラム)の在り方について、国際バカロレア・カリキュラムの実践をもとに検討している。また、原田(2022)⁴⁾は、PYPの探究型概念学習に基づいた探究・協働・概念理解に価値を置いたアクティブ・ラーニングを主とした学習が、「主体的・対話的で深い学び」を導く学びの方法として有効であったとしている。しかし、いずれの研究においても国際バカロレアの中学校段階のプログラム(Middle Years Programme, 以下MYPとする。), さらに高等学校段階のプログラム(Diploma Programme, 以下DPとする。)の社会系教科目が目指すねらいや獲得概念を見越した段階性を踏まえられていないのである。

実際、ESDは持続可能な社会の構築を目指す

教育理念であり、IBはより良い平和な社会を目指す教育プログラムである。より具体的な目指すべき概念が示されているIBプログラムをESDに援用することで、ESDの学習プログラムとしての段階性やその具体的価値を高めることが期待できる。

そこで、本研究は、第一に、ESDとIBプログラムとの関連性を明確にした上で、ESDの授業開発に国際バカロレア機構（International Baccalaureate Organization, 以下IBOとする。）が提供するPYP, MYP及DPの各プログラムの枠組みを援用することの意義を明確にする。第二に、ESDの視点を踏まえた小・中・高の社会系教科の段階性を明らかにした上で、その段階性を踏まえた小学校社会科ESD授業の単元を開発することを目的とする。

最初に、ESDとIBプログラムの理念の共通点からそれぞれの教育の共通性を明らかにし、小・中・高の各段階のIBプログラムを方法としてESD授業を開発する意義について言及する。次に、IBプログラムの小・中・高の社会系教科における段階性を明確にした上で、DP地理が最終的に目指す重要概念から小学校段階において実施すべきものを抽出する。そして、DPから抽出した重要概念を基にESDの視点を踏まえた小学校社会科ESD授業を提案する。

2. ESDとIBの共通性

本章では、ESDとIBプログラムの理念等の共通点からそれぞれの教育の共通性を明らかにし、小・中・高の各段階のIBプログラムを方法

としてESD授業を開発する意義について言及する。

ESDに関しては、ユネスコ（2023）⁵⁾によると「増大する持続可能性（サステナビリティ）に関する課題を解決するための教育の必要性から生まれました。ESDは、学習者が社会をより持続可能なものへと変革するための知識と意識を身につけ、行動を起こすことができるように、行動指向の革新的な教育手法を採用しています。」と示されている。また、持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議（2021）⁶⁾において、「日常生活の中で我々が隣り合わせている課題を地球規模課題の解決と結び付けて考え、それらを解決するための行動変容をもたらすための教育であり、持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を培うための教育である」と言及されている。

また、IBは、ジュネーブに本部を置くIBOが提供する国際的な教育プログラムである。IBO（2017）⁷⁾によると、大学の入学資格として始まったIBは、国際的にその教育を認められることによって「異文化への理解と尊敬を促すというより深い目的に沿ったもの」となり、さらには「児童生徒が自身のまわりの世界のもつ複雑性を理解し、未来のために責任のある行動をとるために必要なスキルと性質を身につけられるような教育」を目指しているとされている。

両者を比較するために、両者の理念が具体的に、どの部分がどのように共通しているかについて整理しておこう。次の表1は、各々の理念と概念についてまとめたものである。

表Ⅰ ESDとIBの理念等の共通点（筆者作成）

	ESD（持続可能な開発のための教育）	IB（国際バカロレア）
理念	<p>【持続可能な開発のための教育ロードマップ】ユネスコ（2023）⁸⁾ 学習者が社会をより持続可能なものへと変革するための知識と意識を身につけ、行動を起こすことができるように、行動指向の革新的な教育手法を採用</p> <p>【第2期ESD国内実施計画p.1】文部科学省・環境省（2021）⁹⁾ （前略）持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動のことである。</p>	<p>【IBの使命】IBO（2017）¹¹⁾ （前略）より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。</p>
概念	<p>【学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕p.4】（国立教育政策研究所2012）¹⁰⁾ 【持続可能な社会づくりの構成概念】</p> <p>I 多様性 II 相互性 } 人を取り巻く環境 III 有限性 } IV 公平性 } V 連携性 } 人の意思や行動 VI 責任性 }</p>	<p>【IBの学習者像】IBO（2017）¹²⁾ 知識のある人</p> <p>【PYP（初等教育プログラム）】IBO（2024）¹³⁾ 8つの重要概念（特徴、機能、原因、変化、関連、視点、責任、振り返り）</p> <p>【MYP（中等教育プログラム）】IBO（2021）¹⁴⁾ 16の重要概念（美しさ、変化、コミュニケーション、コミュニティ、つながり、創造性、文化、発展、形式、グローバルな相互作用、アイデンティティ、論理、ものの見方、関係性、システム、時間・場所・空間）</p> <p>【DP（ディプロマプログラム）】IBO（2020）¹⁵⁾ TOK（知の理論）12の重要概念（エビデンス、確実性、真実、解釈、権力、正当化、説明、客観性、ものの見方、文化、価値観、責任）</p>

まず、表Ⅰ中の「理念」の比較では、ESDの「社会をより持続可能なものへと変革する」、
 「持続可能な社会を実現」とIBの「より良い、より平和な世界を築く」に着目する。国立教育政策研究所（2010）¹⁶⁾では、ESDの内容として「人間の尊厳」を挙げており、その中の項目として「平和」を挙げていることから、ESDが目指す「持続可能な社会」と、IBが目指す「より良い、より平和な世界」は共通のものといえることができる。

次に、表Ⅰ中の「概念」の比較では、ESDの構成概念である「I多様性」は、IBの各プログラムにおける重要概念のうち、「変化」、「文化」、「ものの見方」、「価値観」と関連性が強い。同様にESDのその他の構成概念についてもIBの重要概念との関連性が強いと捉えられる。また、国立教育政策研究所（2012）¹⁷⁾では、ESDの構成概念のうち「I多様性」、「II相互

性」、「III有限性」は「人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念」、「IV公平性」、「V連携性」、「VI責任性」は「人（集団・地域・社会・国など）の意思や行動に関する概念」と整理されている。これらの整理でIBの各プログラムにおける重要概念を見てみると、どのIBプログラムにも両方の概念が満遍なく見られる。

以上の分析から、ESDとIBの理念等については共通点が認められることから、お互いに共通性のある教育であると考えられる。よって、方法論として小・中・高の段階ごとの具体的な枠組みや概念が十分に規定されていないESDの授業開発に、IBプログラムの枠組みや概念を援用することには意義があると考え、次章ではIBプログラムの小・中・高の段階性を見ていくこととする。

3. IBプログラムの小・中・高における社会系教科の段階性とESDコンピテンシーとの関連性

本章では、IBプログラムの小・中・高の各段階とESDとの共通性について、IBプログラムの社会系教科の各段階におけるねらい等とESDコンピテンシーとの共通点を明らかにすることを目的とする。

ESDコンピテンシーについては、国立教育政策研究所（2012）¹⁸⁾ が示す、次の「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」の7つの能力・態度①～⑦を援用する。

- ①批判的に考える力
- ②未来像を予測して計画を立てる力
- ③多面的、総合的に考える力
- ④コミュニケーションを行う力
- ⑤他者と協力する態度
- ⑥つながりを尊重する態度
- ⑦進んで参加する態度

表2¹⁹⁾では、IBプログラム小・中・高の社会

系教科における各段階のねらいが示されており、それらのねらいごとにESDコンピテンシー①～⑦のうち、各ねらいとの関連性が捉えられるESDコンピテンシーの番号を示している。

表2からIBプログラムの社会系教科の各段階のねらいにおけるESDコンピテンシー育成の段階性を読み取ると、ESDコンピテンシー②「未来像を予測して計画を立てる力」についてはPYP及びMYP段階にはなく、DP段階で育成する能力とされていることが分かる。IBプログラムではESDコンピテンシー②「未来像を予測して計画を立てる力」は高等学校段階までは扱わないとされているが、ESDにおいては重要なコンピテンシーの一つであるため、小学校及び中学校段階においても明確に掲げて育成すべき能力であると考えられる。

本研究では、上記のESDコンピテンシー②「未来像を予測して計画を立てる力」に着目し、小・中学校のうち、より基礎的・基本的段階である小学校の社会科においてDPを基にしたESD授業を開発することとする。

表2 IBの小中高の社会系教科のねらい等とESDコンピテンシーの関係

教科・科目	ねらい等
小学校段階 (PYP) 「社会」	<ul style="list-style-type: none"> ・説得力があり、現実の問題に直結する、リサーチ可能な問いかけの仕方を学ぶ。①④ ・自分自身のアイデンティティーをしっかりと理解し、社会における自分の位置を確保する。⑤ ・他の文化の人々への理解を深め、異なる考えや理念を尊重する。③⑤ ・あらゆる文化の児童すべてにとって大切なテーマの探究を通して、人間のありようを理解するために本当に大切な知識を得る。③ ・社会的に責任のある行動に導く、思いやり、創造力、自発性を育む学習体験に参加することで、概念的理解を得る。⑦ ・自分自身や他の人々の体験に関する時間や場所の感覚を得る。⑤ ・自然界や、人間によって作られた世界における、人類の役割や、依存について理解し、責任をもってこの知識を応用することを学ぶ。①③⑥
中学校段階 (MYP) 「個人と社会」	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人間と環境に見られる共通点や多様性を認識すること③ 2. 個人、社会、環境の相互作用や相互依存性を理解すること③ 3. 環境の体系と人間の体系がどのように作用し進化していくかを理解すること③ 4. 人間のコミュニティと自然環境の健やかさについて、問題点を特定し啓発すること①④ 5. 地域およびグローバルなコミュニティの責任ある市民として行動すること⑤⑥⑦ 6. 探究のスキルを養い、個人と社会とそれらが生きる環境との間の関係性を概念的に理解すること①③

<p>高等学校段階 (DP) 「個人と社会」</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「人々の経験と行動」, 「物理的・経済的・社会的環境」, 「社会制度や文化的慣習の発展とその歴史」について, 体系的かつ批判的な学習を奨励する。①③ 2. 個人と社会の性質や活動についての理論, 概念, 議論を特定して, それらを批判的に分析, 評価する力を育む。① 3. 社会を研究するためのデータを収集して詳しく述べ分析する能力, 仮説を検証する能力, 複雑なデータや文献を解釈する能力を育む。①③④⑦ 4. 学ぶということは自分たちが属する社会の文化と他の社会の文化の双方に関連するものであるという理解を促す。③⑤⑥ 5. 人々の態度や意見は多様であり, 社会の研究にあたってはその多様性を受け入れる必要があるという理解を育む。③⑤⑥ 6. グループ3の科目の内容や方法論には議論の余地があり, この分野の学問では不確実性を容認する姿勢が求められるという認識を育む。①②③
<p>高等学校段階 (DP) 科目 「地理」</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人, 場所, 空間, 環境の間で生じるさまざまなスケールの相互関係についての理解を深める。①③ 2. 地理的な問題の結びつきという文脈に照らして, 批判的な認識を育み, 複雑な思考を考察する。これには, 以下のことが含まれる。①③⑤⑥ <ul style="list-style-type: none"> ・地理的な問題, すなわち解決するのが難しい社会的・文化的問題が, 人間の性質や物理的(自然的)な性質に起因する強力なプロセスによってどのように形成されているかについての理解を深める。①③⑥ ・これらの問題をどうすれば解決できるかについての見解を形成するため, 多様な地理的知識を統合する。①②③⑥ 3. さまざまなスケールで資源を管理することにより持続可能な開発を計画する必要があることを理解し評価する。①②③

(中村(2025)²⁰)を基に加筆。ESDコンピテンシー②未来像を予測して計画を立てる力に網掛け。

4. IBDP地理における獲得概念を踏まえた小学校社会ESD授業の開発

本章では、「持続可能なまちづくり」を単元として、DP地理における重要概念を基に、ESDの視点を踏まえた小学校社会科の授業を開発し提案する。

まず、DP地理（高校地理）における重要概念から見ていく。DP地理の指導の手引きには、次の図1のように示され、4つの「重要概念」である「場所」、「プロセス」、「力（権力）」、「可能性」が中心にあり、体系的に整理する概念である「スケール」と「空間的相互作用」がこれらをつないでいるとされている。(IBO(2022)²¹)

「持続可能なまちづくり」に該当する内容をDP地理の指導の手引き（シラバス）から抽出したものが、次の表3である。DP地理の「パート1」における地理的なテーマA～Gのうち、「選択項目G 都市環境」の中の「4. 持続可能な未来の都市システムの構築」の内容に該当すると考えられる。

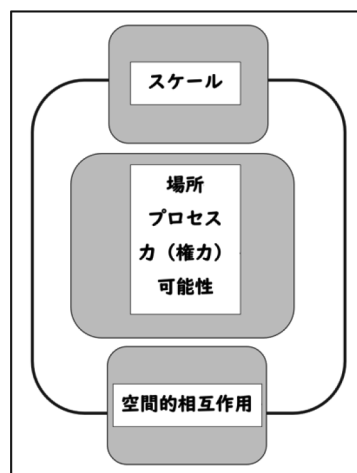


図1 地理学の問題 (IBO (2022) を基に作成)

表3 DP地理（高校地理）の指導の手引きにおいて「持続可能なまちづくり」に該当する部分

4. 持続可能な未来の都市システムの構築（推奨指導時間：6～8時間）	
都市システムの持続可能な管理のための未来の可能性	2050年に向けた都市成長の見通し（非都市と都市間の人口移動の地域レベルや大陸レベルのパターンと傾向，都市人口とその構成の変化など）災害に強い都市の設計（自然災害や世界情勢の悪化するリスクに備えるための管理戦略など） ・可能な戦略を例証する詳細な事例2件 環境都市設計（都市の環境フットプリントを管理する戦略など） ・可能な環境戦略を例証する詳細な事例2件 スマートシティの設計と都市のサービスおよびシステムを実現する新しい技術の使用（意図的に開発された居住区，既存の居住区で使用できる改修技術）

（IBO（2022）から抜粋）

表3の内容とESDコンピテンシーを基に開発したのが、表4のDP地理（高校地理）における地理ESD授業の単元計画である。DP地理（高校地理）では、「持続可能なまちづくり」の概念をシステムの構築として捉え、レジリエン

ト・シティ，エコ・シティ，スマート・シティといった具体的な都市システムの提案を検討させている。表4中の①～⑦はESDコンピテンシー①～⑦に該当する。

表4 DP地理（高校地理）における地理ESD授業の単元計画

単元名	持続可能なまちづくり「未来の都市システムの構築」		
単元時間	6～8時間		
対象	SL/HL共通（高等学校第2学年～第3学年）		
地理概念	可能性（Possibility），プロセス（Process），スケール（Scale），システム（Systems），持続可能性（Sustainability）		
単元目標	持続可能な都市システムの構築を支える管理戦略や技術を検討し，その限界や可能性を評価する。 ①②		
探究の問い			
事実的な問い	Q1：都市の生態学的フットプリントを削減するには，どのような戦略が効果的か？③		
事実的な問い	Q2：社会的，経済的，環境的な持続可能性を同時に達成するためには，どのような管理アプローチが必要か？③⑤⑥		
概念的な問い	Q3：技術は，都市の持続可能な未来に向けた万能薬となり得るか？その潜在的な課題は何か？①②③		
議論的な問い	Q4：持続可能な都市システムを構築する上で，最も重要な地理的概念は何か？管理戦略の成功と限界をどのように評価すべきか？①②③⑥		
時数	テーマと学習内容	活動・指導方法	評価要素
1-2	持続可能な都市の概念と未来の予測 学習内容：持続可能な都市システムの定義と特徴（インプット/アウトプット，サーキュラーシステム）。2050年までの都市成長の予測（地域パターン，農村から都市への移動）。	講義，概念マップの作成（サーキュラーシステムとリニアシステム）。国連の都市化予測データの分析（地理的技能）。②③	形成的評価（概念マップの正確性）

3-4	レジリエント・シティのデザイン 学習内容：レジリエント・シティの概念，必要性。エスカレートする気候リスク（例：洪水，ヒートアイランド）および地政学的リスクへの適応戦略。	グループディスカッション（都市の脆弱性），資料分析（適応戦略の事例）。事例1：気候変動リスク管理（例：ロッテルダム/シンガポール）。①④⑦	形成的評価（ディスカッションへの参加と論拠）
5-6	エコシティとスマートシティの戦略 学習内容：エコシティのデザイン原則（エネルギー，交通，廃棄物管理）。スマートシティ（ICT活用）による効率化と社会的課題。	エコシティとスマートシティの比較対照（Tチャート作成）。事例2：エコシティまたはスマートシティの成功事例（例：フライブルク，バルセロナ）。①③	形成的評価（Tチャートの完成度）
7	戦略の評価と地理的技能 学習内容：持続可能性向上のための戦略（レジリエント，エコ，スマート）の評価（メリット，課題，移転可能性）。地図・GISデータの活用。	選択した2つの詳細事例（シラバス要件）に基づいた評価エッセイのアウトライン作成。過去問分析。①③	形成的評価（アウトラインの論理的な構成）
8	総合的な知識の統合と評価 学習内容：単元全体の知識の統合。試験問題1での応用力強化。	総括的評価（試験問題1の拡張応答型問題への解答練習）。単元学習の自己評価とフィードバック。①②③	総括的評価（論述解答）

（国立教育政策研究所（2012），IBO（2017・2018・2021・2022）より筆者作成。）

次に，MYP「個人と社会」（中学校社会科）及びPYP「社会」（小学校社会科）においてIBOが示す重要概念について見ていく。

まず，MYPの16の重要概念のうち，「個人と社会」の学習によってもたらされる重要概念は，表5の網掛けの部分が見えるように，「変化」，「グローバルなかかわり」，「体系」，「時間・場所・空間」の4つである。これらのMYP

「個人と社会」（中学校社会科）の4つの重要概念は，いずれもDP地理の4つの重要概念のうちの「場所」，「プロセス」の2つの概念とのつながりがあると考えられるが，政治的，社会的，経済的，自然的な力学を示す概念である「力（権力）」と，未来を考察する概念である「可能性」についてはMYP「個人と社会」には示されていない。

表5 MYPの重要概念

美的感性	変化	コミュニケーション	共同体
つながり	創造性	文化	発展
形式	グローバルなかかわり	アイデンティティー	論理
ものの見方	関係性	体系	時間・場所・空間

次に，表6のPYPの「重要概念」と「社会」についての観点を見てみると，DP地理の4つの重要概念のうちの「力（権力）」及び「可能性」に当たるものは見られない。この点については，DP段階を見越してPYP及びMYP段階においても「力（権力）」，「可能性」といった

ESDコンピテンシーの育成にとっても重要な概念として取り入れていくことが重要であると考えられる。

なお，MYP「個人と社会」及びPYP「社会」においてIBOが示す「関係概念」の中には，「持続可能性」の概念は示されている。

表6 PYPの重要概念と社会についての観点

重要概念	社会についての観点
特徴 それはどのようなものか。	個人、集団、歴史上の期間、環境について認識できる特徴。
機能 それはどのような働きをするのか。	社会や自然界における出来事、システム、関係性の働き。
原因 それはなぜそうなのか。	人間と自然現象の因果関係。
変化 それはどのように変わっているのか。	時間と共に起こる、人間、社会、環境の変化の性質。
つながり それは他のものとのように繋がっているのか。	人間や環境に影響を及ぼす相互作用。過去、現在、未来がすべてつながるやり方。
ものの見方 それにはどのような見方があるか。	人間が多様な理解を導く方法として、知識と経験をつなげるやり方。
責任 私たちの責任は何か。	人が自分自身、集団、環境に対して負う個人的及び共同責任。
振り返り 私たちはどのようにして知るのか。	この探究から学ぶこと。そして学習者が新しい理解を応用する方法。

そこで、本研究で提案する「DP地理（高校地理）を基にPYP段階を考慮して開発した小学校社会科ESD授業」として、DP地理の重要概念である「可能性」を取り入れた単元計画を開発し、表7に示した。DP地理の重要概念であ

る「可能性」は、ESDにとっても重要な概念である。表7中の網掛け部分は、PYP段階の授業に追加した重要概念である「可能性」の部分を示している。

表7 DP地理（高校地理）を基にPYP段階を考慮して開発した小学校社会科ESD授業

単元名	持続可能なまちづくり「スマートシティって何？」
単元時間	10時間
対象	小学校第4学年
テーマ	私たちの暮らす場所（Where We Are in Place and Time）
中心的アイデア	テクノロジーは、私たちが暮らす都市やコミュニティの <u>持続可能性</u> と生活の質を向上させるために活用できる。
主な概念	つながり（Connection）、機能（Function）、責任（Responsibility）
関連するPYP態度	好奇心、創造性、協力
探究の問い	
事実的な問い	Q1：スマートシティとは何か、そしてどのような要素（交通、エネルギー、情報など）で構成されているのか。③
概念的な問い	Q2：技術（例：センサー、アプリ）は、 <u>将来の人々の生活、安全、環境をどのように改善する可能性があるか</u> 。①③⑥
議論的な問い	Q3： <u>将来、より良いスマートシティを築くために、私たち一人ひとりができることは何か</u> 。②④⑤⑦

時数	探究	活動内容	評価
1-2	導入（中心的アイデアの解釈）	アイデアの喚起：生徒に「 <u>未来の理想の街</u> 」を描かせ、その理由を共有させる。スマートデバイスやアプリが生活で役立っている例を出し合う。	形成的な評価：理想の街のスケッチと説明（以前の知識の把握）
3-4	探究1	スマートシティの定義：ビデオや画像を通して、スマートシティの例（例：スマート交通、スマートゴミ箱）を紹介。 <u>未来において都市の機能と技術がどのようにつながりを生み出しているかを議論する。</u> ②⑥	形成的な評価：スマートシティの構成要素のリスト作成または分類
5-6	探究2	影響の調査：スマート技術（例：スマートグリッド、公共交通アプリ）が、エネルギー消費や時間の節約など、 <u>未来のコミュニティの生活の質</u> をどのように改善しているかを、具体例を挙げて調査し、比較する。②③	形成的/記録：スマート技術の「プラス面/マイナス面」のTチャート作成
7-8	探究3	私たちの責任：スマート技術を適切に利用する上での責任（データプライバシー、デジタルデバイドなど）について話し合う。 <u>より良い未来の街にするために</u> 、子供たちができる行動（例：自転車の利用、ゴミの分別を促すアイデア）を考える。②④⑤⑦	形成的な評価：自分の役割と責任に関するブレインストーミング
9-10	総括的評価	最終プロジェクト：「私のスマートコミュニティ提案」。生徒は <u>将来、自分の住む街をよりスマートにするための具体的なアイデアを1つ選び</u> 、その機能、利点、そして成功させるための私たちの責任をポスターで発表する。①②④⑤⑦	総括的な評価：最終プロジェクト（ルーブリックに基づき、中心的アイデアと概念の理解度を評価）

（国立教育政策研究所（2012）、IBO（2017・2018・2021・2022）より筆者作成。）

5. 成果と課題

本研究の成果をとして、次の3点を挙げる。第1として、ESDとIBプログラムの理念の共通性を明らかにした上で、ESDにおいてIBプログラムの重要概念を援用することによって、DP地理（高校地理）の授業を基に小学校社会科ESD授業を開発した点が挙げられる。第2として、PYP「社会」（小学校社会科）、MYP「個人と社会」（中学校社会科）及びDP「地理」（高校地理）においてIBOの各指導の手引きが示す重要概念について分析し、その段階性を明らかにした点が挙げられる。第3として、IBプログラムにおける小・中・高の重要概念の分析を踏まえた上で、小学校段階の単元計画にも高等学校段階の重要概念の一部を取り入れたESD授業の開発を提案した点が挙げられる。

課題としては、本研究ではESDとIBの理念に基づく小学校社会科の授業開発を行ったが、学習指導要領に基づく社会科授業との違いや、実践する場合の留意点等について扱うことができなかった点が挙げられる。今後は、高等学校と小学校に加え、中学校段階における授業も開発

し、各校種段階の授業実践を行えるよう学習指導要領の観点も踏まえ、社会系教科におけるESD授業の小・中・高の段階性を検討していきたい。

註

- 1) 松岡靖（2018）：持続可能な社会の再構築を図る社会科ESD授業の開発—小学校第5学年単元「青空を取りもどした北九州市」の場合—、社会系教科教育学会「社会系教科教育学研究」第30号
- 2) 新谷和幸（2023）：社会科ESDの基盤として相互依存概念を学ぶ授業の検討—小学校第3学年単元「おいしい！？カキ」を事例に一、日本教科教育学会誌 第46巻 第2号
- 3) 高橋周平・紙田路子（2022）：国際バカロレア教育が学校教育改革に与える示唆 単元“Sharing the planet（この地球を共有すること）”の実践を通して、岡山理科大学紀要第58号
- 4) 原田卓（2022）：国際バカロレア PYP に基づく探究型概念学習の「主体的・対話的で深い学び」に対する有効性、国際言語文化研究科部紀要3号
- 5) ユネスコ（2023）：持続可能な開発のための教育 ロードマップ、国連教育科学文化機関

- 6) 持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議(2021):我が国における「持続可能な開発のための教育(ESD)」に関する実施計画(第2期ESD国内実施計画)Ⅰ
- 7) 国際バカロレア機構(IBO)(2017):国際バカロレア(IB)の教育とは?日本語版,前文,Ⅰ
- 8) ユネスコ(2023):持続可能な開発のための教育 ロードマップ,国連教育科学文化機関
- 9) 文部科学省・環境省(2021):我が国における「持続可能な開発のための教育(ESD)」に関する実施計画(第2期ESD国内実施計画)
- 10) 国立教育政策研究所(2012):学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究 最終報告書
- 11) 国際バカロレア機構(IBO)(2017):国際バカロレア(IB)の教育とは?日本語版,前文,Ⅰ
- 12) 同上
- 13) 国際バカロレア機構(IBO)(2024):初等教育プログラム(PYP)「社会」の学習範囲と順序 日本語版
- 14) 国際バカロレア機構(IBO)(2021):中等教育プログラム(MYP)「個人と社会」指導の手引き 日本語版Ⅱ月改訂
- 15) 国際バカロレア機構(IBO)(2020):ディプロマ・プログラム(DP)「知の理論」(TOK)の指導の手引き
- 16) 国立教育政策研究所(2010):学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究 中間報告書
- 17) 国立教育政策研究所(2012):学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究 最終報告書
- 18) 同上
- 19) 中村は下記論文で,IBのPYP「社会」,MYP「個人と社会」,DP「個人と社会」及び「地理」のそれぞれのねらい等との共通性及び類似性を示していると述べているが,それぞれの具体的な関連性について言及されていない。
- 20) 中村光則(2025):国際バカロレア教育の小中高の系統性を踏まえた小学校社会科の授業開発—ESDコンピテンシーの育成に焦点化して—,こども教育研究 第5号
- 21) 国際バカロレア機構(IBO)(2022):ディプロマ・プログラム(DP)「地理」指導の手引き 日本語版Ⅱ月改訂